

大好きな景色

下長中学校 三年 福山 遊良

私は、家の中から見える景色が大好きだ。天気や季節の変化とともに表情を変える、たくさんの植物を見ると、とても癒される。

私の家は、私が五歳のときに建てられた。家が完成して間もない頃、家の前に作った二つの花壇に何を植えようか、両親が悩んでいた。そこで、家族全員で緑化まつりに行き、家を華やかにしてくれる植物を探した。会場に入り、しばらくして、

「ねえ、まだ？」

と、正直植物に対して興味がなかった私は、早く帰りたいと言わんばかりに両親に話していた。

「まだまだ時間かかるよ。」

と父が言い、ぐったりする私。いやいや歩いてみると、両親の声がした。

「これ、いいね。」

二人の視線の先には、立派なもみじの木があった。さらに、そのもみじの枝は赤く、美しかった。思わず、

「うわあ。」

と声ももれた。私の隣にいた姉も、目を輝かせていた。家族全員が一目ぼれしたもみじは、我が家のシンボルになった。他にも、沈丁花、おもと、さつき、しゃくなげ、玉龍、つつじが我が家の花壇を彩ってくれることになった。その

日の帰り道は、嬉しい気持ちでいっぱいだった。数日後、緑化まつりで購入した木々たちが家に届き、業者さんに植えてもらった。今までは全く違う窓からの景色に、私は心を躍らせた。両親も、

「いいね。」

と満足していた。

ある日、家の駐車場で遊んでいた私は、花壇の縁を囲むように植えられた玉龍を見かけた。小さなブルーベリーのようなものがたくさん付いているのを見て、好奇心旺盛だった私は、かわいいと思い、すべての玉をとってしまった。

「見て。こんなにきれいな玉がたくさんあった。いたから、とってきたよ。」

と満面の笑みで母に見せた。すると母は、悲しそうな顔で、

「全部とってきちゃったの。」

と私に問いかけた。私がついてしまった玉は、いずれ花が咲くものだったと聞いて、親や玉龍に対して申し訳なさでいっぱいになった。この出来事があったから私は、植物がもつ命を大切にしようと思えるようになった。

春が訪れ、様々な植物が鮮やかに色づく頃、外に出ると桃のような匂いがした。匂いの主の所へ行くと、きれいな沈丁花の花が開いていた。私は、毎年この匂いを嗅ぐと、春が来たなど感じる。同じ時期には、椿も美しい紅色の花が咲く。私の家にある椿は、父方の祖父母の家から

おすそわけしてもらったものだ。力強い生命力にいつも心を動かされる。

梅雨の時期には、さつきが満開になる。雨によって落ちた花までも美しい。

そして秋には、我が家のシンボルであるもみじがきれいに赤く色づく。私はこのもみじは、どの観光地にもみじよりも立派で美しいと思っている。また、冬には、赤い枝と白い雪のコントラストに目を奪われる。両親が一目ぼれした理由もよくわかる。

どの季節も、窓から見える景色は植物の表情が様々で、見ていて楽しい。

私は、小さい頃から、たくさん植物に囲まれて育ってきた。家の庭で遊ぶとき、登下校のとき、家族とのお出かけのときも、私の目にはいつも植物が映っていた。私が植物を好きになったのも、我が家の花壇を彩る木々や、花々のおかげだ。生き物の命は尊いものであることを知ったのも植物のおかげだ。また、このような素晴らしい景観をさらに華やかにするために、手入れをしてきている祖父母に感謝したい。遠い昔の時代から人々に愛され続けてきた植物は、見る人に癒しや笑顔、勇気を与えてくれる。これは、いつの時代も変わらない。私は、これからも、大好きな景色を守るために、自分でできることをしていく。そして、末永く植物を愛していく。